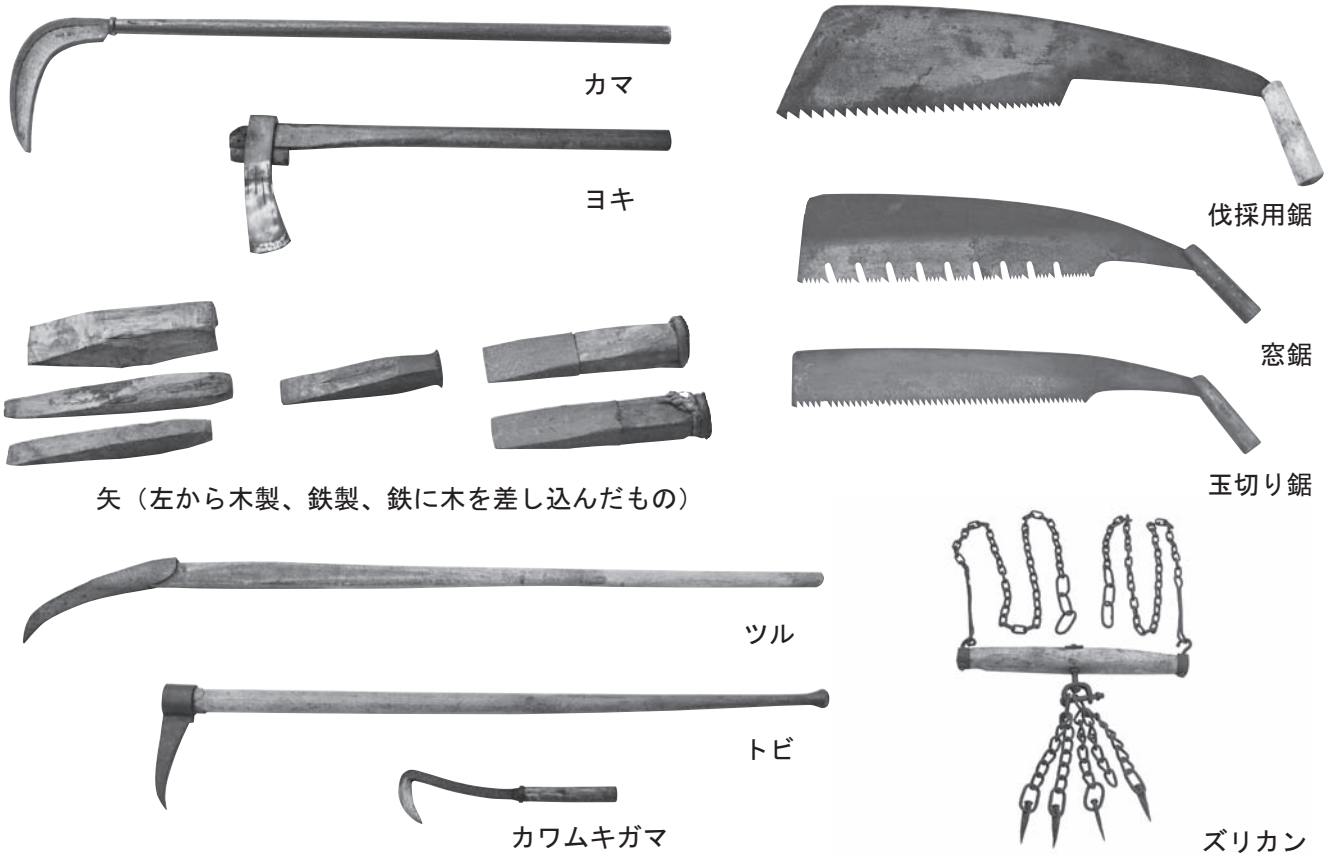
沼津市歴史民俗資料館

資料館だより

Vol.36 No.2（通巻191号）

2011.9.25（年4回発行）



寄贈資料の中から

林業の道具

今回は、山樵（さんしょう）用具のうち、木を育て、伐採・搬出するまでに使われる道具を紹介します。機械化が進んだ昭和30年代まではこれらの道具が使われました。

カマは、造林鎌といって下刈りの道具で、全長が約120cmあり、苗木の生長を妨げる植物を取り除く作業に使います。

ヨキは木を切り倒すための斧で、矢はクサビです。矢の種類には、木製、鉄製、鉄に木を差し込んだものがあり、木の堅さなどで使い分けます。矢には、鋸を挽く際に切り口がしまって動かなくなるのを防ぐ役割と、木を倒す方向を決める役割とがあります。

木は梢が山の上を向くように倒します。まず倒す方をヨキで三角に切り込み、そこへ木槌で矢を打ち込んで木が倒れないようにし、反対側からヨキで切るか、または鋸で挽いていきます。

伐採用鋸は、ヨキで木の根を切って受け口を入れた後に、切り倒しをするためのものです。

窓鋸（まどのこ）も伐採用で、改良鋸（かいりょうのこ）ともいい、刃の間の窓におがくずがたまり、挽くたびに排出されるようになっています。

玉切り鋸（たまぎりのこ）は、伐採された木を利用しやすい長さに切り分けるためのものです。

トビは、全長140cmの大型の鳶口で、材木などを移動させる道具です。テコにして動かしたり、材木に打ち込んで引いたりします。

ツルもトビと同じ用途で、全長は176cm、土佐鉤（とさづる）ともいいます。穂先を材木の下に差し込んで枕木を当て、テコにして動かします。トビで動かないような大きな材木も、ツルなら動かすことができます

ズリカンは、鎖の先端のクサビを木口に打ち込み、牛馬に引かせて山から降ろす道具です。

カワムキガマは樹皮をはぐ道具で、杉や檜の皮は屋根の材料や船の防水に用いられました。

駿河湾の漁

鈴木亮一さんの漁話

船上の仕事

《櫓を漕ぐ話》

巾着(巾着網漁)でもってね、マグロを捕ったりイワシを捕ったりみんなしただけんど、昔は櫓で網をかけた。巾着の網船は６丁から７丁(の櫓)で漕ぐ。(エンジンの付いた船が) 網をかける船を２台引っ張って歩くだよ、昔はね。昔の人は知恵が無かった。それで、その船でもって引っ張って網をかければね、楽にやれるものを、わざわざその船を放すだよ。放してやっちまうから今度は網船が櫓を漕いで網をやるだよ、それでも魚は捕れた。エンヤコラー、エンヤコラー、ドッコイってね。櫓を漕いでエンヤコラとやっただからさ、オラも古しいには古しいよ。今の人は櫓を漕げねえじゃん。だから時代劇でもって川を渡るときに櫓を漕いでるのを、なんだこりゃ素人だってすぐわかる。

ていうのはね、櫓を漕ぐ、そうするとこっち側にヒモ(早緒)をくっつけてあって、こっちに櫓がある。そうするとほんとの漁師なら、このヒモが弛まねえ。ピーンと張ってるだよ。これがピッコンピッコン弛んでるやつは、手真似でやってるだけだよ。昔の衆は櫓を漕ぎ始めに、これが弛んでたら後ろでぶん殴られたからね。昔の人はみんなそうだから、そうして仕込まれただから。

これ (早緒) が切れたりすれば、身体が後ろへとふっ飛んじまうよ。(櫓を)前へ向こうへ押す時は、そんなに力はいらねえだよ。だけど自分のところへ引くときには、精一杯の力でやるから、このヒモが切れればあんた、身体が後ろっ側へふっ飛んでっちまう。櫓を漕ぐと、デッキの木のところへと背中が着くだから。昔の衆はみんなそやって小突かれてきたから、今の人はちっと仕事すればかったるいなんて、何を言ってるんだか。ヒモのところにはうんと力がかかっているもの。あれが弛んでるようなら、波のある時にはすっ飛んで行っちまうよ。(早緒は)櫓が波にさらわれないように付いている訳じゃあない。

櫓がぴんとしてるやつが、ひたる (力がかかってしなる) ような櫓じゃなかったらきかねえ (漕げない) だよ。棒切れがいのいたって(動いたって)きかねえだよ。その櫓がこうと曲がるように、波に乗ってしょぶく(引く)だから。そうすると曲がるような櫓だら、こんどは身体が起きて来るだよ。だけどピーンとしてるようなやんじゃあ、向こうへと反動がねえから、骨が折れるだよ。だけんどこっちに余裕があって、こうと曲がってひたってるやつは、手を弛めれば起きるじゃん。それだから楽に身体がこっちへ行くさ。(櫓を漕ぐと、船の推進力で引いた櫓が押されて元に戻り、背が床に付くほど櫓を引いた身体が、櫓と一緒に起きあがる。) そのかわりなんにも曲がんないでこうなってる櫓はダメだよ、カエシがねえだから。そこに難しさがあんだよ。

《陸揚げの様子》

それから見ればあんた、今の衆は遊びみたいなもんだよ、魚だってみんな小さいタモでカメ(魚槽)から出したのに(昔は人海戦術で陸揚げした)。今は機械でグーッといってバッと揚げるじゃん、そうすりゃサッと落ちるじゃん。それをタモでやって、タモのワッサ(輪)のところに２人いて、それをこうと人間が並んで、タモでもってこうと掬って、そいでサンヤードッコイ、サンヤードッコイつって、船のコベリからみんなでタモを突っぱねた。(船から魚を出し、魚市場の岸壁に陸揚げするのに、大きなタモを人力で押し上げた。) そいで市場までタモを持っていって、よいさってなもんさ。船同士で競争だもん。

だから昔の人は長に生きられるけんど、今の人は長には生きられねえよ。

《船に海水をかける》

木はね、ヒノキにしてもカシにしても、上っ側はしらったい (白い)。それは腐りが早い。そいで中身はあきゃあ(赤い)だよ。そいでそのあきゃあとこはね、真水じゃあダメだけんど、雨が降ったりするとしょみず (塩水) をかける。しょみずをかけてればぜったいに腐らない。

船を作るでしょ、ヒノキでもってデッキを作るわけだよ板を。雨が降ればツルーッツルと滑るだよ。雨水でもって(板から)灰汁が出るだよ、だから滑るわけだよ。それをひっぽって(放って)置けば腐るだけ。しょみずかけとけば、ぜったい腐らない。

だから、ヒノキにしても、ケヤキにしても、カシノキにしても、上っ側のしれえ(白い)これきゃーぐらいのところは、みいんな腐っちゃう。芯とうの赤いとこは何十年置いたってなんのことはねえ。そういうもんだよ木ってやつは。だから丸太があっても、切ったとこを見りゃあ真ん中赤くなってるじゃん。ありゃあぜったい腐らないだよ。真水で、雨水でひっぽかしておいたじゃあ腐っちまうよ、だけんど塩水かけてればぜったい腐らねえ。

それだから船を作るときは大工さんがね、しれえ(白い)やつはやしい(安い)からそれ使うだよ。で、漁師がしぶい(渋い)顔するだよ。

(話：鈴木亮一氏 沼津市志下在住)

※今回の漁話は、うかがったお話の口調や方言をそのまま表記しました。方言には傍点を付け、( ) で補足説明をしています。

桶作りの技を磨いて60余年
ー富士市大淵　渡辺安雄氏ー

平成22年に本館所蔵の「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」が、関係者の努力によって国の重要有形民俗文化財に指定されたことは記憶に新しい。

これらの文化財のうち、水桶や浮樽など35点の補修に関わったのが、近隣の富士市大淵で長年、桶作りに取り組んできた渡辺安雄氏(81才)である。沼津市内の桶作りが絶えてしまった現在、実は本館と富士地区の桶作りには、結びつきがある。先年本館で「生活用具とものづくり」展が開催され、かつて富士市本市(もといち)場(ば)で営まれていた桶作りが紹介された。その作業の様子は、沼津市内の桶作りとともに、数々の道具類や写真などとともに再現されて、常設展示となっている。

渡辺氏の作業場のある大淵地区は富士市の高台に位置し、昔から水の確保に苦労してきた。しぼり水といわれるわずかな湧水や雨水、井戸水が生活を支えてきた。古くは井戸掘りの名人がいて、住民が共同で井戸掘りや井戸ざらいに参加し、井戸の祭りの風習もあったが、上水道が整備された昭和30年代以降は、水神の碑にその名残りを留めている。渡辺氏も戦後間もない頃から近所の人たちに「桶屋さん」と親しまれ、井戸桶や水桶、風呂桶、漬け物樽、米櫃、寿司桶、タライ、肥え桶などの製作、修理に長年携わってきた。

作る物によって、木材の材質が異なる。桶や樽などにはふつう、木のくるいが少ないスギ、寿司桶には、酢をほどよく吸収するサワラ、風呂桶には水分に強いカヤ・ヒノキというように使い分けてきた。木材は一定の期間、自然乾燥が必要であるので、ふだんから木材の確保をしているが、良質の木材の入手は年々難しくなっている。また、木の部品を束ね、締め付けるタガも用途に応じて、針金と竹を使用してきた。渡辺氏によると、「十月の闇竹」が好まれ、その頃の竹が加工がしやすく、針金よりも長持ちするという。

▲手足を上手に使って木の厚みを調整する

また、部品をつなぐ際に用いる竹クギは年数のたった厚みのある竹を選んでいる。竹を煎って使う職人仲間もいたという。

桶や樽の製作では、内部の水分や塩気を外に通さないように、側面の部分が上から見て、木目が同心円状になるような木取り(板目)をしている。(一般的には、桶は柾目、樽は板目が用いられる)。曲面の部分は刃先の湾曲が異なる大小の鉋や特殊なスケールを使って丁寧に作っていく。そして、内部の曲がり具合やタガの調整などの作業は、両足で製品を挟み、まるで両手の動きと同じように、足を締め付けたり、ゆるめたりしながら、バランスに気をつけて仕上げていく。渡辺氏によれば、漬け物用の四斗樽でも三尺のタライでも基本的な作業の仕方は同じであるという。

生活様式の変化にともなって、新品の桶・樽類の受注は減り、渡辺氏が以前製作した用具の補修が仕事の中心になっている。補修の際の木材は、木がなじむように、元の用具と同じ材質のものを選んでいる。

例えば、小ぶりの米櫃の補修では、まず、いたんでいる部分の様子を見ながら、やや大きめな補修材を埋め込み、周囲の厚みに合わせるように小刀で削っていく。また、かぶせ蓋や底蓋の割れは、竹クギでつなぐ。そして、タガの厚みを調整しながら仕上げていく。

▲渡辺氏の製作した桶、タライなどの用具

長年、いわゆるヤマの地域に暮らし、主に井戸桶や漬け物樽などの製作・補修に携わってきた渡辺氏にとって、今回の補修で手に触れたウミ(漁村)で使用されてきた道具類は、新鮮な発見があり、「形がヤマのものと違っておもしろく、海水の塩気がよく残っていた。」という。渡辺氏は、昔なじみの人に頼まれた桶・樽の補修に気軽に応じたり、富士市今泉の田宿川(たじゅくがわ)で例年行われている、タライ乗りのタライを寄贈したりするなど、今も地域に根付いた取り組みをなさっている。

渡辺氏長年の技が、沼津市の貴重な文化財の価値づけと保存に貢献した意義を認識するとともに、市域の枠を越えて技術の伝承がされていくことを望みたい。

(平成22・23年度本館研究員 内田昌宏)

資料館からのお知らせ

企画展の開催について

本年度の企画展「船上の道具とくらし」を平成23年11月３日から来年 の２月26日までの日程で開催します。

この企画展も、昨年度の特別展「大漁満足―駿河湾の漁具コレクション」に続き、平成22年３月に国重要有形民俗文化財に指定された「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」を広く知っていただくことを目的として、そのコレクションの中から、船上で使用する道具にスポットを当てて紹介するものです。

歴民講座の開催について

下記のとおり、歴民講座を開講します。企画展の会期中でもあり、企画展の展示資料に関係する講座の内容となっています。

期　日　平成23年11月27日(日)午後２時から
会　場　市立図書館 ４階 視聴覚ホール
内　容　「漁師さんと語る船でのくらし」
※事前申し込みが必要です。10月20日㈭から電話での受付を開始します。（TEL .932-6266）

体験学習･チャカー運転実演の開催について

企画展の会期中の平成23年11月13日㈰に体験学習と漁船エンジンの稼動実演を行います。

・体験学習「漁師さんに教えてもらう結びの技」

元漁師さんに、漁で使う綱の縛り方や、釣糸の結び方を教わります。

・実演「船の発動機チャカーの運転実演」

古い石油発動機の再現に携わっている市内大岡の野津和男さんに、我入道で開発された小型漁船用の石油発動機「チャカー」の稼動実演をしていただきます。

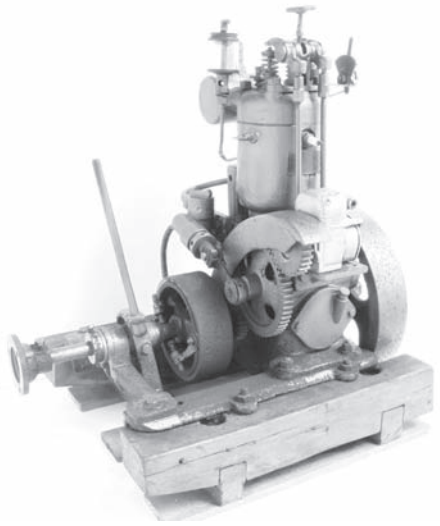
「チャカー」は、我入道で鉄工所を経営していた山本源一郎氏により、小型漁船用の発動機として、大正時代の終わりころに開発されたもので、電気着火式の４ストロークの発動機です。狭い船内であまり作業の邪魔にならないように縦置きに工夫したといわれています。当初は、空冷式の単気筒で３馬力だったようですが、後に水冷式になり、昭和12年頃には、３馬力から16 馬力までの機種が揃い、２気筒のものも製作されたようです。燃料は石油(灯油または軽油)で、始動時にはガソリンも使ったようです。

この地域では、この発動機を積んだ小型漁船を「チャカ」と呼ぶようになりました。

戦後、漁船用の小型のディーゼルエンジンの普及によって次第に姿を消しました。クランクシャフトからギヤに繋がり、さらに２本のカム棒により吸排気弁を動かしますが、運転中はこの音が「チャカチャカ」と鳴るので、「チャカー」と呼ばれていたとされています。電気着火方式で、高圧電流を発生させるマグネトーと火花を飛ばすスパークプラグが付いており、その「着火」の発音から「チャカー」と呼ばれたという説もあります。

当館で所蔵しているものは、土肥の小下田に残されていたもので、山本源一郎氏の親戚の方が見つけて寄贈して下さったそうです。シリンダヘッドは丸い筒型をしており、「沼津市川瀬町 山本製作所 ３馬力、880回転、Date.27.8」と記されており、製作時期は昭和27年と推測されます。

水冷式で、付属の冷却水ポンプで海水を汲み上げ、シリンダヘッドを循環させて冷やしていました。三菱製のマグネトーが付属しています。



館所蔵のチャカー

沼津市歴史民俗資料館だより
2011. 9. 25　発行　　Vol.36　No.2（通巻191号）
編集・発行　〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　TEL 055-932-6266
FAX 055-932-6266
URL:http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/rekimin/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp

R100
古紙配給率100%再生紙を使用しています